

1. はじめに

言語や感情をはじめ、文化、伝統など、人間の営みの多くは脳に由来します。芸術作品を見たときに感じる落ち着きや不安、気分の高揚なども脳に由来するものです。芸術作品に対する反応がどのように引き起こされるのかについて、脳についての説明を交えて書いていこうと思います。

2. 脳の視覚システム

脳という臓器には、外界を知覚し、判断して、それに基づいて行動するというはたらきがあります。明るさや色、形、動きなどの知覚、つまり「視覚」は脳のはたらきです。「視覚」とはどのように生じるのでしょうか。

まず、視覚情報は反射光として始まります。光は角膜で屈折して網膜に投射されます。次に、網膜は投射された光の情報を外側膝状体というところに送ります。そして、外側膝状体からさらに一次視覚皮質というところに送られて、そこに到達した情報は二手にわかれます。一つは **what** 経路と呼ばれ、脳の底の領域に情報を送り、形や色、動きを認識します。もう一つは **where** 経路と呼ばれ、頭頂部にある脳領域に向かって情報を送り、外界における物体の位置を認識します。

このように、脳の神経回路に生まれつき備わっている視覚のプロセスによって物体の色や輪郭、動き、場所を認識することに加えて、認知的影響や高次の心的機能に関連させる過程を経て、私たちは芸術作品を認識します。

3. 芸術作品の知覚プロセス

脳のはたらきは数多くあります。その中で、芸術作品の知覚において重要になるものの一つが、「学習」です。ここでの「学習」とは、経験を通して人間、あるいは動物の行動が変化することを意味します。そして、学習によって得た知識を長く維持する能力を「記憶」と呼びます。学習と記憶は、人間の経験において大きな役割を果たします。私たちは、学習によって得た知識を通して世界や文明について知り、世代間で文化を伝えることができます。芸術作品を見ると、鑑賞者の脳では、物体の色や形、動き、輪郭などの情報と鑑賞者自身の経験が結びつけられます。たとえば、色を処理する脳領域と感情を司る脳領域が結びついています。そのため、赤は勇気・愛情・血を表し、緑が春や成長を表すよう

に、各場合の文脈に応じて、色によって感情が呼び起こされます。学習のメカニズムは、端的に言うと、個人の経験によって神経細胞のつながりが変化し、結果として脳の構造が変わることです。ひとりひとりの人生経験が異なるため、各人の脳の構造が異なり、さらに芸術作品に対する反応も異なります。特に、抽象芸術の場合は、肖像画や風景画などの具象芸術に比べるとあいまいであり、写実的な描写を行わないので、鑑賞者の想像力や鑑賞者自身の経験との結びつけにより大きな負荷がかかります。抽象画家は、絵を線や色といった要素に単純化することによって、鑑賞者にその絵に対する主観的反応を引き起こすよう意図しているのです。

4. おわりに

脳は、物質でできた世界と、バーチャルな情報社会という二つの広大な世界の交差点であると言われます。芸術作品を生み出すのは脳のはたらきであり、芸術作品が「わかる」のもまた脳のはたらきです。絵画を見てそれが「よい」と思うのはなぜか。感情、共感、意識の本質は何か。学習はどのようにして起こるのか。脳は私たちが投げかける幅広い間に答えてくれます。ここまで読んで頂きありがとうございます。最後に、著名な抽象画家・筆者が面白いと思った抽象画家を中心にまとめて紹介したいと思います。是非インターネットで検索するなどして、作品をご覧ください。

5. 画家の一覧

- ・アルノルト・シェーンベルク
- ・アンディ・ウォーホール
- ・アンリ・マティス
- ・ウィレム・デ・クーニング
- ・グスタフ・クリムト
- ・ジャクソン・ポロック
- ・チャック・クローズ
- ・ピエト・モンドリアン
- ・マーク・ロスコ
- ・モーリス・ルイス

6. 参考文献

- ・エリック・R・カンデル(2019)『脳はなぜアートがわかるのか』(高橋洋訳)青土社
- ・理化学研究所脳科学総合研究センター編(2013)『脳科学の教科書』岩

波ジュニア新書